



日本地球化学会ニュース

No. 195 December 2008

Contents

年会・総会報告	2
2008年度日本地球化学会年会 実施報告	
第3回地球化学会ショートコース 実施報告	
夜間セッション報告	
2008年度日本地球化学会総会報告	
学会からのお知らせ	16
名誉会員のご紹介	
「柴田賞・学会賞・奨励賞」2008年度受賞者紹介	
「柴田賞・学会賞・奨励賞」2009年度受賞候補者推薦の募集	
2009年度第1回鳥居基金助成の募集	
学会評議員会議事録	24
2008年度第2回	
研究集会報告とお知らせ	28
鳥居基金助成実績報告（2007年度第2回）	
日本地球惑星科学連合2009年大会のお知らせ	
ゴールドシュミット国際会議2009のお知らせ	
地球化学の現場 No. 2	30
株式会社セレス 環境部	
小池祐一	

年会・総会報告

●2008年度日本地球化学会第55回年会 実施報告

日本地球化学会年会実行委員会委員長
松尾基之（東京大学・大学院総合文化研究科）

2008年度日本地球化学会第55回年会は9月17日(水)から19日(金)の3日間、東京大学教養学部駒場キャンパスで開催された。東京大学のキャンパスでの開催は1989年（この時も駒場キャンパス）以来19年振りのことである。昨年の岡山での年会が終わった後、11月26日に東大所属の日本地球化学会会員有志で最初の準備委員会をもち、実行委員会を立ち上げ、本年度の年会終了まで11名の実行委員によって運営がなされた。その間8回の実行委員会が駒場と本郷で開催された。

今回の年会では、従来とは異なるいくつかの試みを行った。その一つは、従来のように数個の課題講演以外は一般講演で行うという枠組みは採用せず、あらかじめ30課題程度のセッションテーマを立てておき、すべての発表はそれらのセッションのどれかの中で行ったことである。セッションテーマの設定にあたって会員に募集したところ、7件の応募があり、それらを含めて最終的に28のテーマを決めてコンビーナーにセッションを任せることとした。各コンビーナーが自分のセッションを盛り上げるため、講演を依頼したりしたこともあり、参加者数と発表数は空前の数を記録した。協力いただいたコンビーナーの方々、手弁当の招待講演を快く引き受けてくださった方々にこの場を借りて御礼申し上げたい。このような事情で日本地球化学会会員以外の参加も増えることが予想されたため、共催団体として、日本化学会、日本鉱物科学会、日本地質学会に加わっていただいた。

講演申込でも新しい試みを行った。これまでは講演申込締め切り日が、要旨提出締め切り日よりひと月程早く設定されており、時期をずらして行うため、講演申込の際の題名や著者が要旨と異なるというケースが目につき、できるだけ新しい成果を発表する事にもなまなかった。講演申込を先に行くと、それをもとに早くプログラムが組めるというメリットはあるが、今回は講演申込と要旨の提出を同時に行い締め切りもできるだけ遅く7月14日に設定した。その結果、プログラム編成を極めて短期間に行わざるを得ず、講演数の増加も加わって、大変な作業になった。編成したプログラムは直ちにホームページ上に公開し、要旨も直

にJ-Stage上で公開することにより、要旨集の事前送付の必要をなくし、手間と経費の節減を計った。

年会の前日、9月16日(火)には、第3回ショートコースが13号館1312号室で開かれた。大学院生を中心として約50名の参加があり、9時半から18時近くまで活気にあふれた会であった。

今回の年会の有料の参加登録は、総計533名（うち学生201名）で、内訳は予約申込391名、当日申込142名であった。なお、初日18時から行われたセッション「地球化学教育の現状と今後の課題、地球化学者のキャリアパス」は、学術研究発表とは趣を異にする企画で、学会会員以外の一般の方にも参加費なしで公開された。講演4件のほかパネルディスカッションも大変な盛況で、昨今のポストドク就職難を反映してか、この問題への関心の高さが示された。マスコミの取材もあり、10月3日の科学新聞の第8面に5段組で紹介された。

研究発表は口頭発表とポスター発表で行われた。28セッションで行われた口頭発表件数は325件で、従来の4会場では収容しきれないので、6会場に増やし、初日午前午後、2日目午後、3日目午前午後をフルに使って行われた。使用した講演会場は、13号館1323 (A会場)、12号館1225 (B会場)、1222 (C会場)、1213 (D会場)、1214 (E会場)、1212 (F会場)である。6会場ともなると参加したいセッションが重なるなどの不便も多々あったようで、プログラムもタイトであったため休憩室で談笑する姿も少なく、展示に足を運ぶ時間もなかったようであった。各講演会場には、Microsoft社のPower Point 2007をインストールしてあるPCを1台用意し、発表者は休憩時間などに発表用ファイルを入れておくように指示された。さらに、短い休憩時間で多数のファイル入力は混乱が予想されるので、年会受付においたPCからも発表用ファイルが入力でき、各会場のPCに移せるように準備しておいた。結果的には受付のPCを使った人は2割程度で、大部分は各会場のPCに入力するか持参のPCをつないだ。PC関連で大きなトラブルはなく、プログラム進行時間の遅れの原因とはならなかった。

ポスター発表は講演会場から歩いて数分の生協食堂2階で行われた。ポスター発表件数は98件で、初日47件、2日目51件と2日間に分けて行った。コアタイムは初日、2日目ともに昼食後の1時間15分を充てた。ポスター会場が広めであったため、移動がしやすく、議論もしやすかった。今年度も学生会員を対象にボス

ター賞の選考を行い、柏原輝彦（広島大理）、賞雅朝子（東大理）、堀真子（広島大理）の3氏が選ばれ、懇親会で表彰された。ただ、一つだけ残念なことは、初日にポスター会場で置き引きがあったことで、なくなった鞆は未だに出てきていない。今後は、ポスター会場での名札のチェックを厳密に行うなど、このような事件を防ぐために、セキュリティ面を検討しなければならない。

将来計画委員会は、初日にA会場で19時35分からを予定していたが、その前に行われた「キャリアパス」のセッションが延長されたため、駆け足になってしまい、次年度では落ち着いて議論が交わせる時間がとれるようにプログラムを組むことが望まれる。また、会期期間中の昼食時にGJ編集委員会、地球化学編集委員会、事典編集委員会が開催された。例年は2日目の午後に行っている総会と受賞講演が2日目の午前に行われた。今年の年会は地球化学会以外の会員の参加が多く、総会は会員を対象としたプログラムであることに配慮したためである。9時から始まる総会に参加者が少なくなるのではと懸念されたが、例年以上の参加者であった。本年度の受賞者は、柴田賞が石渡良志会員（都立大名誉教授）、学会賞が海老原充会員（首都大理工）、奨励賞が齊藤拓也会員（国環研）、谷水雅治会員（JAMSTEC）、平野直人会員（金沢大フロンティア）であり、多くの参加者が受賞講演を聴いた。

2日目の18時から懇親会が生協食堂で行われた。参加者は予約申込149名、当日申込42名の合計191名（うち学生47名）であった。講演会場によっては終了が遅れるところもあり、急いで移動してもらったが、定刻よりは遅れて始まった。予約人数に合わせて料理を注文し、直前の参加予想で追加注文を行ったこともあり、料理や飲み物があつという間になくなるということではなく、参加者には満足いただけたと思っている。

企業展示は、イアス、エス・ティ・ジャパン、サーモフィッシャーサイエンティフィック、ジャスコインタナショナル、昭光通商、地球科学研究所、東京大学出版会、Nu Instrumentsの8社から協力をいただいた。年会の財政面で貢献していただき、この場を借りて謝意を表したい。参加者が多かったにもかかわらず、企業展示にあまり人が集まらず、出展企業には気の毒な気がした。プログラムが、時間的余裕がなく組まれていたことと関係しており、来年からの検討事項かと思う。

今回も昨年と同様に、年会業務のかなりの部分を国際文献印刷社に委託した。年会HPの作成・管理、参加登録・参加費等徴収、講演申込・要旨受付、要旨集作成などである。各種問合せは、年会HP内に示した事務局の問合せメールアドレスに送ってもらい、送られたメールは実行委員全員が読めるようにして、担当の委員が直ちに対応した。申込に関するトラブルが多かったのが、参加費には要旨集1冊の代金が含まれていることを知らずに、要旨集を別途注文したケースで、参加申込の文章をよく読めば分かるはずだが、次年度からは間違いが少なくなる書き方に工夫が必要であろう。学会当日に受付で20名近くの方に返金した。参加費等の支払いのクレジットカード決済は定着しているが、中には所属機関で支払う場合に銀行振込しかできないケースもあり、今回は年会の口座に振り込んでもらった。講演申込と要旨の提出とを同時に行い、講演題目や発表者が、両者で異なる事例が減ることを期待したが、同時に行っても不一致のケースが1割程度あった。多くは、講演申込の際、複数の発表者であっても、一人しか書いてこない事例で、講演申込のデータベースでプログラムの印刷版を組むので、そのままですと単独著者の発表としてプログラムに印刷されてしまう。今回は実行委員会の中で、講演申込のデータと要旨との照合を一つずつ行い、要旨に書かれている講演題目や発表者に合わせてプログラムを直した。これは人が目で読んで照合する大変に手間のかかる作業で、丸2日かかった。来年からは、講演申込の内容と要旨の内容との不一致の投稿を少しでも減らすため、HP上で申込者が目につき易いところに丁寧な注意書きを書くなどの工夫が必要かと思う。

本年度の年会は参加者も多く、天候にも恵まれ、成功裏のうちに終わったが、従来とは違うことが多く、参加者が当惑したり不便を感じたことが多かったのではないかと懸念している。運営上の不手際も多々あったかと思う。それらは今回の実行委員会で整理して、次回の広島大学の実行委員会へ引き継がれ、改善されることを期待している。最後に、2008年度日本地球化学会第55回年会に参加して下さった皆様に深く感謝いたします。

●第3回地球化学会ショートコース 実施報告

行事幹事 平田岳史

2008年日本地球化学会年会（於東京大学教養学部）

にあわせ、第3回ショートコースを開催した。今年は専門テーマとして、加速器を用いた巨大サイエンス、環境化学、宇宙化学、表層環境進化をとりあげ、また教養テーマとして科学コミュニケーションをとりあげた。プログラムを以下に示す。なお本年度のプログラムは2007年ショートコースのアンケート結果および昨年度の日本地球化学会年会における夜間集会での提案を取り入れたものとなっている。

(1) 第3回ショートコースプログラム

日時：2008年9月16日（火曜日）

会場：東京大学教養学部（駒場）13号館1312号室

はじめに 9：30～9：40

「Inquisitiveness and Chastity in Science」

平田岳史（東工大）

講義1 9：40～10：55

「加速器づくりと地球科学」吉岡正和（高エネ研）

10：55～11：00 討論

講義2 11：00～12：15

「加速器質量分析とTIMSによって明かされる地球環境変動」横山祐典（東大）

12：15～12：20 討論

12：20～13：20 昼食

講義3 13：20～14：30

「太陽系形成初期の同位体不均一と元素合成」

横山哲也（東工大）

14：30～14：40 討論

講義4 14：40～15：50

「硫黄同位体からみる古環境」

上野雄一郎（東工大）

15：50～16：00 討論

講義5 16：00～17：30

「研究者と科学コミュニケーション」

横山広美（東大）

17：30～17：45 討論

Closing 17：45～18：00

(2) 参加者について

参加者は58名（講師5名を除く。内訳は、日本地球化学会学生会員32名、一般会員5名、非会員21名）で

あった。第2回ショートコース（於岡山大学）と比較して9名の増加となった。第1回ショートコースは午後から半日の日程で行ったが、第2回以降は全日開催の形式をとっている。午前開始の利点は講義時間にゆとりがとれることであるが、反面、参加者には経済的な負担をかけることになる（コース前日を東京で宿泊する必要があるため）。第2回、第3回のいずれもが午前開始であるにもかかわらず、結果的には参加者数が減少しなかったことから、参加者が参加するか否かを判断する材料として、開催場所や日程に比べ、講義内容が大きなウエイトを占めることを示していると考えられる。

本ショートコース開催にあたり、会場設営に際し日本地球化学会実行委員会・組織委員会の全面的なご支援をいただいた。また、Agilent Technology社からボールペンを提供していただいた。また、東京工業大学（平田研）から大学名入クリアファイルを提供した。さらに東京工業大学大学院のスタッフ・学生諸氏には、ショートコースの準備から当日の運営まで全面的に協力いただいた。ここで感謝の意を表したいと思います。

(3) 会計報告

本ショートコースは、学部・大学院生を対象としているため、参加者の多くは日本地球化学会会員の学生会員であった。しかし今年是一般会員と非会員の参加者数が増加した。昨年は、日本地球化学会の会員であれば、学生会員・一般会員の何れも同額の参加費（1,000円）を設定していたため参加費収入が減少した。そこで今年日本地球化学会の学生会員（学生パック申し込み手続き中の学生も含む）に対しては参加費1,000円とし、一般会員および非会員の方は3,000円とした。

支出に関しては、講師全員に対し、一律10,000円の講師料を支払った。本年度は講演者が全て関東近県の方であったため、旅費の支援はしなかった。また昼食については、これまでの1,000円から800円（飲み物を含む）とし、支出を抑えた。今年新たな支出として会場費（12,000円）が加わった。

以下に収支結果表を示す。

2008年度日本地球化学会ショートコース報告

収入

参加登録	単位	人数	小計
学生会員	1,000	32	32,000
一般会員	3,000	5	15,000
非会員	3,000	21	63,000
参加者総数		58	

支出

	合計		
講師謝金	10,000	5	50,000
講師飲み物	140	5	700
弁当 (お茶代含む)	800	66	52,800
参加者および講演者 (欠席者3名分含む)			
会場費	12,800		12,000
合計			115,500

収支 -5,500

領収書	50,000	講師謝金 (吉岡, 横山佑, 横山哲, 上野, 横山広)
	52,800	弁当代
	12,000	会場代

収支決算として、今年は5,500円の赤字となった。第2回ショートコースでの赤字額 (49,560円) と比較して低く抑えることができた。赤字額が減少した理由は、講師旅費支援がなかったためである。

●夜間セッション報告

将来計画委員会委員長 海老原充

2008年度日本地球化学会初日 (9月17日) 午後8時から約1時間、年会A会場において「夜間セッション」が開催された。時間的制約もあり、以下に述べる3つの課題について話し合いをもった。以下にその概略をまとめる。括弧内は話題提供者 (いずれも将来計画委員会メンバー)。

(1) 今後の学会の運営方法について (15分) (鍵)

本年度の年会は従来と異なる開催形式で行われたが、その開催を企画するに至った経緯、及び年会の概要が鍵裕之年会実行委員によって紹介された。セッション制を取り入れることにより、年会の企画に会員外も含めた多くのコンピーナーからの協力を得られたことは特筆に値する。本年会での試みは、開催地実行委員会 (LOC) とプログラム委員会との分業の可能性も提起した。夜間集会参加者に本年度の年会の開催形式を評価するかどうかを聞いたところ、評価すると

する人がほとんどであった。また、開催する側に立った場合に同様の取り組みを行う意向があるかとの問いかけに対しても否定的な意見は聞かれなかった。年会の開催に関しては、より学会主導で行うべきであるとする意見が出された一方で、これまで通りLOCによる自由度も尊重すべきであるとの意見も聞かれた。今年の年会は今後の年会のあり方を考える上で大きな問題提起をし、年会が地球化学会の最大行事であることを考えると、今後の会の活性化を考える上で貴重な機会となったことは間違いない。この機会を逃さず、よりよい年会開催に向けての議論を今後評議員会等で積極的に行う必要があるとの意見に集約された。なお、来年度の広島大学での開催に関しては、本年度の開催形式を積極的に取り入れながら行いたいとの意向が日高評議員より示された。

(2) 広報委員会の取り組みについて (15分) (鈴木)

今期から発足した広報委員会の取り組みに関して鈴木広報担当幹事から説明があった。5月に開催された日本惑星科学連合、7月にカナダ・バンクーバーで開催された Goldschmidt 2008における広報活動の紹介の後、今後の活動についての提案があった。地球化学会会員による出前講義を実施することに対して、講師になることを含めて、出席した会員の多くの方が賛意を示した。また、広報委員会の活性化のために委員への積極的参加を募ることに対して、学生会員や高校の理科の先生を含めてより広い立場の人を委員として迎え入れることの提案が出された。また、インターネットを有効に利用したアウトリーチの方策を考えるべきでありとし、そのための効果的なアイデアが会場から提案された。

(3) Geochemical Journal 誌の今後のあり方について (30分) (海老原)

昨年度年会での「夜間セッション」での話し合いの後を受けて、再度 Geochemical Journal (以下 GJ) のあり方について議論した。これまでの議論で明らかのように、GJを取り巻く近年の環境は誌質と発刊費用の2つの点で楽観できない状況にある。具体的には、前者は、会員の論文掲載数が減少している一方で、アジア、特に中国からの投稿数が急増している状況、後者は、科研費による出版助成金が頭打ちから減少傾向にあり、早晩、この助成金の打ち切りも現実問題として起こりうる状況にそれぞれ対応する。もし来年度出版助成金の打ち切りが起これば、地球化学会は単年度収支で大きな赤字になり、数年のうちに財政は

危機的状況になることは想像に難くない。こうした事態への対応について、佐野現編集長、松田元編集長の意見聴取も交え、議論した。佐野編集委員長から、極端な例として、編集と発行を分離し、発行を出版社に託す（身売りする）選択肢も紹介されたが、それよりもまずは会の収入に見合う支出のなかで会誌の発行を考えるべきではとの意見が会場から出され、大方の賛意を得た意見であるとの印象を受けた。また、テクニカルにはページチャージ制の導入、電子化した発行を進めることが有効であろうとの意見があった。この問題は喫緊の課題として、将来計画委員会、GJ編集委員会、会計幹事間で意見交換しつつ、対応策を早急にまとめる必要があると強く認識させられた

限られた時間の中で、活発な議論ができ、形骸化しない「夜間セッション」となったものと総括される。話題提供者、将来計画委員、セッションに出席した方々にお礼申し上げる。

●2008年度日本地球化学会総会報告

庶務幹事 小畑元

日時：2008年9月18日 9時～10時15分

場所：東京大学駒場キャンパス13号館1323室

第55回年会（東京大学教養学部）期間中に実施した。

1. 開会宣言
2. 議長選出

2009年度年会実行委員長の清水洋会員が議長に選出された。

3. 会長挨拶 蒲生俊敬会長
4. 年会委員長挨拶 松尾基之委員長
5. 議事

1) 名誉会員の承認について

名誉会員推薦委員会において杉崎隆一会員、綿抜邦彦会員が名誉会員候補者として推薦され、評議員会の投票により決定したことが、海老原充名誉会員推薦委員会委員長により報告された。両会員が名誉会員となることが承認された。

2) 2007年度事業報告および決算報告、監査報告

2007年度事業報告（小畑庶務幹事）および決算報告（南会計幹事）、監査報告（松久監事）が行われ、承認された。

3) 2008年度事業中間報告および会計中間報告

2008年度事業（小畑庶務幹事）、会計（南会計幹事）について、中間報告が行われた。

4) 2009年度事業計画および予算案（小畑幹事・南幹事）

2009年度事業計画（小畑庶務幹事）および予算案（南会計幹事）が提案され、承認された。

5) 各種報告

(5-1) Goldschmidt 2008バンクーバー会議の報告と同2009ダボス会議の紹介

鈴木広報幹事から、Goldschmidt 2008バンクーバー会議の様子が報告され、Goldschmidt 2009ダボス会議の概要が紹介された。

(5-2) 第3回地球化学ショートコースの報告

2008年9月16日に開催された第3回地球化学ショートコースの様子が平田行事幹事から報告された。

6. 会場からの意見・提案など

Geochemical Journal 冊子体希望調査の途中経過について質問があり、その概数が回答された。

7. 名誉会員証贈呈式

杉崎隆一名誉会員、綿抜邦彦名誉会員に蒲生会長より、名誉会員証が贈呈された。

8. 2008年度柴田賞、日本地球化学会賞、日本地球化学会奨励賞授賞式

各賞受賞者に蒲生会長から賞状とメダルが授与された。

日本地球化学会奨励賞

齊藤拓也会員「大気および氷床コア試料の精密分析に基づく揮発性有機化合物の地球化学的研究」

谷水雅治会員「重元素の高精度安定同位体分析とその同位体分別機構に関する基礎的研究」

平野直人会員「沈み込む海洋プレート上の新タイプ火山活動の発見とメカニズムの解明」

日本地球化学会賞

海老原充会員「放射化学的手法による太陽系形成初期における物質進化の研究」

柴田賞

石渡良志会員「現世堆積有機物の地球化学的研究」

9. 閉会宣言

2007年度事業報告

1. 会員状況 (2007年1月1日～12月31日)

	正会員	(一般)	(学生)	(学生 バック)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	在外会員
2007.1.1	910	(751)	(87)	(26)	(46)	11	12	933	(39)
入会	55	(17)	(10)	(28)	(0)	2	0	57	(2)
退会	-34	(-19)	(-10)	(0)	(-5)	-2	-2	-38	(-2)
変更	0	(2)	(-25)	(7)	(16)	0	0	0	(1)
除名	-14	(-9)	(-5)					-14	(-3)
2007.12.31	917	(742)	(57)	(61)	(57)	11	10	938	(37)

2. 年会, 委員会等開催

日本地球惑星科学連合2007年大会 (5/19～24; 千葉, 幕張メッセ国際会議場), ゴールドシュミット国際会議2007 (8/19～24; ケルン・ドイツ), 年会 (9/19～21; 岡山大学津島キャンパス), 総会 (9/20; 岡山大学津島キャンパス), 評議員会4回 (2/17, 6/23, 9/18, 9/21), 幹事会3回 (2/10, 6/16, 9/8), GJ編集委員会2回 (うち1回をケルンで開催), 地球化学編集委員会1回, 学会賞等受賞者選考委員会1回, 鳥居基金選考委員会2回, 将来計画委員会2回, 役員選挙管理委員会1回

3. 会誌発行

Geochemical Journal: Vol. 41 (1～6)

地球化学: Vol. 41 (1～4号)

4. ニュース発行 No.188 (3/25), 189 (5/25), 190 (9/4), 191 (12/28) (「地球化学」と合本)
5. 第2回 地球化学ショートコースの実施 (9/18)
6. 日本地球化学会賞等の授与 (学会賞1件, 奨励賞2件)
7. GJ賞授与 (ケルンで授与式)
8. 鳥居基金助成

第1回 海外渡航2件 (うち1件辞退), 国内研究集会1件,

第2回 国内研究集会1件

9. 学会などの共催・後援・協賛

日本原子力学会「第45回原子力総合シンポジウム」(1/25～27) 共催

日本質量分析学会「第55回質量分析総合討論会」(5/14) 共催

日本アイソトープ協会「第44回アイソトープ放射線研究発表会」(7/4～6) 共催

日本粘土学会「第51回粘土科学討論会」(9/12～

14) 共催

放射化分析研究会「第12回放射化分析の最近の動向に関する国際会議 (MTAA-12)」(9/16～21) 共催
SIMS XIV 国際会議組織委員会「SIMS XIV」(9/16～21) 協賛

2008年度中間事業報告

1. 会員状況 (2008年1月1日～8月31日)

	正会員	(一般)	(学生)	(学生 バック)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	在外会員
2008.1.1	917	(742)	(57)	(61)	(57)	11	10	938	(37)
入会	54	(27)	(0)	(27)	(0)	0	0	54	(1)
退会	-23	(-7)	(-14)	(0)	(-2)	0	-1	-24	(-1)
変更	0	(16)	(11)	(-28)	(1)	0	0	0	(1)
除名									
2008.8.31	948	(778)	(54)	(60)	(56)	11	9	968	(38)
2007.8.31	941	(761)	(67)	(56)	(57)	11	12	964	

2. 年会, 委員会などの開催

日本地球惑星科学連合2008年大会 (5/25～30; 千葉, 幕張メッセ国際会議場), ゴールドシュミット国際会議2008 (7/13～18; バンクーバー・カナダ), 年会 (9/17～19; 東京大学駒場キャンパス), 総会 (9/18; 東京大学駒場キャンパス), 評議員会3回 (2/16, 6/11～7/31 (電子メール開催), 9/16), 幹事会3回 (2/9, 5/31, 9/6), GJ編集委員会1回, 地球化学編集委員会2回, 学会賞等受賞者選考委員会1回, 鳥居基金選考委員会2回, 将来計画委員会1回, 名誉会員推薦委員会1回

3. 会誌発行

Geochemical Journal: Vol. 42 (1～4)

地球化学: Vol. 42 (1～3号)

4. ニュース発行 No.192 (3/20), 193 (6/25), 194 (8/31) (「地球化学」と合本)
 5. 第3回 地球化学ショートコースの実施 (9/16)
 6. 日本地球化学会賞等の授与 (柴田賞1件, 学会賞1件, 奨励賞3件)
 7. GJ賞の授与 (バンクーバーで授与式)
 8. 鳥居基金助成
- 第1回 海外渡航1件 (1件辞退), 国内研究集会2件 (うち1件辞退),
- 第2回 海外渡航1件
9. 学会などの共催・後援・協賛
- 日本原子力学会「原子力総合シンポジウム2008」(5/14～15) 共催

日本質量分析学会「第56回質量分析総合討論会」
(5/14~16) 共催

第7回核融合エネルギー連合講演会組織委員会「第
7回核融合エネルギー連合講演会」(6/19~21) 共
催

日本アイソトープ協会「第45回アイソトープ放射線
研究発表会」(7/2~4) 共催

可視化情報学会「可視化情報学会全国講演会釧路
2008」(10/11~12) 協賛

Materials Research Society of Japan「IUMRS ア
ジア国際会議2008」(12/9~13) 協賛

日本地熱学会「日本地熱学会平成20年学術講演会」
(10/29~11/1) 協賛

2009年度事業計画

1. 年会 (広島大学, 2009年9月の3日間)
2. 総会 (広島大学, 年会期間中)

3. 日本地球惑星科学連合2009年大会 (5/16~21; 幕
張メッセ)

4. ゴールドシュミット国際会議2009 (6/21~26; ダ
ボス・スイス)

5. 評議員会4回 (うち1回はメールによる会議)

6. 幹事会3回

7. 会誌発行

Geochemical Journal : Vol. 43 (1~6)

地球化学 : Vol. 43 (1~4)

8. 地球化学 : Vol. 43 特別号 (会員名簿) の発行

9. ニュース発行 No. 196~199

10. 「地球と宇宙の化学事典」の出版編集作業 (継続)

11. 日本地球化学会賞等の授与

12. 鳥居基金助成2回 (1月, 7月)

13. 学会などの共催・協賛

14. 役員選挙の実施

2007年度日本地球化学会決算報告（2007年1月1日～12月31日）

収入の部

科目	収入額（円）		予算額（円）	
1. 会費収入	8,687,000		8,304,000	
(内訳) 一般正会員		7,005,000		7,020,500
学生正会員		487,000		508,500
シニア正会員		235,000		200,000
賛助会員		320,000		260,000
在外会員		640,000		315,000
2. 刊行物売上	3,981,900		3,981,900	
3. 広告料	800,000		1,172,500	
(内訳) 地球化学 会員名簿		800,000 0		940,000 232,500
4. 出版助成	5,100,000		4,900,000	
5. 公開発表助成	0		0	
8. 雑収入	369,755		50,000	
9. 前年度名簿積立金	500,000		500,000	
10. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
11. 前年度繰越金	15,328,104		12,520,991	
収入計	38,166,759		34,829,391	

支出の部

科目	支出額 (円)		予算額 (円)
1. 事業費	16,683,173		17,060,000
1.1 出版費	12,900,711		13,650,000
1.1.1 印刷費	10,464,571		10,850,000
1.1.2 編集費	1,520,910		1,500,000
1.1.3 電子化経費	252,000		300,000
1.1.4 発送費	663,230		1,000,000
1.2 行事費	478,222		450,000
1.3 公開発表助成	0		0
1.4 学会賞経費	50,488		40,000
1.5 委員会活動費	227,500		300,000
1.6 名簿積立金	0		0
1.7 名簿作成費	1,122,448		1,050,000
1.8 会員業務委託費	1,888,309		1,450,000
1.9 会員業務郵税	15,495		120,000
2. 管理費	2,600,562		2,140,000
2.1 庶務費	150,000		150,000
2.2 会議費	84,652		100,000
2.3 通信費	0		50,000
2.4 旅費	1,184,500		1,000,000
2.5 選挙費	89,775		250,000
2.6 会計費	0		100,000
2.7 雑費	46,655		50,000
2.8 ホームページ費用	793,100		400,000
2.9 雑誌保管費	251,880		40,000
3. 予備費	200,550		400,000
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000
7. 次年度繰越金	15,282,474		11,829,391
支出計	38,166,759		34,829,391

1.1. 出版費明細

事項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	8,225,446	2,239,125	←	0	10,464,571
1.1.2 編集	1,250,000	250,000	0	20,910	1,520,910
1.1.3 電子化	252,000	0	0	0	252,000
1.1.4 発送	663,230	←	←	0	663,230
出版費計	10,390,676	2,489,125	0	20,910	12,900,711

英文誌：Geochemical Journal：Vol.41, No. 1～6。

和文誌：地球化学：Vol.41, 1～4（ニュース No.188～191, 連合ニュース No.4 を合本発行）。

ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、全て英文誌と同時に発送し、発送費は英文誌に含まれる。

貸借対照表 (2007年12月31日現在)

資産の部		負債・正味財産の部	
現金	40,707	前受会費	2,521,500
普通預金 (会計)	6,869,649	基本財産充当引当金	3,400,000
普通貯金	11,191,465	正味財産 (繰越金)	15,282,474
国際文献印刷 郵便振替	2,807,440	計	21,203,974
国際文献印刷 みずほ銀行	294,713		
計	21,203,974		

2007年度鳥居基金決算報告 (2007年1月1日～12月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額 (円)	科目	金額 (円)
1. 前年度繰越金	3,471,533	1. 助成	300,000
2. 普通貯金利息	5,599	内訳 助成100,000円3件	
3. その他	0	2. その他	0
収入計	3,477,132	3. 次年度繰越金	3,177,132
		支出計	3,477,132

資産状況	
科目	金額 (円)
普通貯金	3,177,132
定額貯金	0
資産計	3,177,132

2007年度ゴールドシュミット国際会議基金決算報告 (2007年1月1日～12月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額 (円)	科目	金額 (円)
1. 前年度繰越金	2,522,011	1. Goldschmidt 2007共催金	387,557
2. その他	0	2. Goldschmidt 2007参加旅費 (赤木幹事)	200,000
収入計	2,522,011	3. Goldschmidt 2005参加旅費 補助 (山本幹事)	80,000
		4. 次年度繰越金	1,854,454
		支出計	2,522,011

2008年度日本地球化学会中間決算（2008年1月1日～8月31日）

収入の部

科目	収入額（円）		予算額（円）	
1. 会費収入	7,484,000		8,127,500	
(内訳) 一般正会員		6,600,000		6,840,000
学生正会員		354,000		507,500
シニア正会員		290,000		285,000
賛助会員		240,000		240,000
			在外会員	255,000
2. 刊行物売上	0		4,090,200	
3. 広告料	0		1,020,000	
(内訳) 地球化学		0		1,020,000
会員名簿		0		0
4. 出版助成	4,200,000		5,100,000	
8. 雑収入	20,118		50,000	
9. 前年度名簿積立金	0		0	
10. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
11. 前年度繰越金	15,282,474		11,829,391	
収入計	30,386,592		33,617,091	

支出の部

科目	支出額 (円)		予算額 (円)	
1. 事業費	4,997,775		16,360,000	
1.1 出版費	2,772,350		13,500,000	
1.1.1 印刷費	966,000		10,850,000	
1.1.2 編集費	1,650,000		1,650,000	
1.1.3 電子化経費	0		0	
1.1.4 発送費	156,350		1,000,000	
1.2 行事費	564,004		450,000	
1.3 学会賞経費	77,112		40,000	
1.4 委員会活動費	214,200		300,000	
1.5 名簿積立金	0		500,000	
1.6 名簿作成費	0		0	
1.7 会員業務委託費	1,359,289		1,450,000	
1.8 会員業務郵税	10,820		120,000	
2. 管理費	868,525		1,800,000	
2.1 庶務費	150,000		150,000	
2.2 会議費	28,275		100,000	
2.3 通信費	0		50,000	
2.4 旅費	468,000		750,000	
2.5 選挙費	0		0	
2.6 会計費	0		100,000	
2.7 雑費	39,950		50,000	
2.8 ホームページ費用	100,800		400,000	
2.9 雑誌保管費	81,500		200,000	
3. 予備費	289,275		400,000	
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
7. 次年度繰越金	0		11,657,091	
支出計	9,555,575		33,617,091	

1.1. 出版費明細

	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	0	966,000	←	0	966,000
1.1.2 編集	1,250,000	250,000	150,000	0	1,650,000
1.1.3 電子化	0	0	0	0	0
1.1.4 発送	156,350	←	←	0	156,350
出版費計	1,406,350	1,216,000	150,000	0	2,772,350

ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、全て英文誌と同時に発送し、発送費は英文誌に含まれる。

2009年度日本地球化学会予算 (2009年1月1日～12月31日)

収入の部

科目	2009年予算額 (円)		2008年予算額 (円)	
1. 会費収入	8,718,500		8,127,500	
1.1 一般正会員		7,001,500		6,840,000
1.2.1 学生正会員		200,000		332,500
1.2.2 学生正会員(修士バック)		357,000		175,000
1.3 シニア正会員		280,000		285,000
1.4 賛助会員		240,000		240,000
1.5 在外会員		640,000		255,000
2. 刊行物売上	3,981,900		4,090,200	
3. 広告料	1,000,000		1,020,000	
3.1 地球化学		800,000		1,020,000
3.2 会員名簿		0		0
3.3 ウェブ		200,000		—
4. 出版助成	4,200,000		5,100,000	
8. 雑収入	50,000		50,000	
9. 前年度名簿積立金	500,000		0	
10. 前年度基本財産充当金	3,400,000		3,400,000	
11. 前年度繰越金	11,657,091		11,829,391	
収入合計	33,517,491		33,617,091	

支出の部

科目	2009年予算額 (円)		2008年予算額 (円)	
1. 事業費小計	16,930,000		16,360,000	
1.1 出版費	12,900,000		13,500,000	
1.1.1 印刷費	10,500,000		10,850,000	
(GJ)	8,000,000		8,000,000	
(地化)	2,500,000		2,850,000	
1.1.2 編集費	1,800,000		1,650,000	
(GJ)	1,250,000		1,250,000	
(地化)	250,000		250,000	
(ニュース/HP)	300,000		150,000	
1.1.3 発送費	500,000		1,000,000	
1.1.4 電子化経費	100,000		0	
1.2 行事費	600,000		450,000	
1.4 学会賞経費	80,000		40,000	
1.5 委員会活動費	300,000		300,000	
1.6 名簿積立金	0		500,000	
1.7 名簿作成費	1,000,000		0	
1.8 会員業務委託費	2,000,000		1,450,000	
1.9 会員業務郵税	50,000		120,000	
2. 管理費小計	2,050,000		1,800,000	
2.1 庶務費	150,000		150,000	
2.2 会議費	100,000		100,000	
2.3 通信費	50,000		50,000	
2.4 旅費	750,000		750,000	
2.5 選挙費	250,000		0	
2.6 会計費	100,000		100,000	
2.7 雑費	50,000		50,000	
2.8 ホームページ費用	400,000		400,000	
2.9 雑誌保管費	200,000		200,000	
3. 予備費	400,000		400,000	
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
7. 次年度繰越	10,727,491		11,657,091	
支出計	33,507,491		33,617,091	
実収入*	17,950,400		18,387,700	
実支出**	19,380,000		18,060,000	
差引	-1,429,600		327,700	

*実収入：収入計から繰越金，基本財産引当金，名簿積立金を除いたもの。

**実支出：支出計から繰越金，基本財産引当金，名簿積立金を除いたもの。

学会からのお知らせ

●新名誉会員のご紹介

杉崎隆一名誉会員



杉崎先生の学術的業績は、柴田賞の受賞者紹介（地球化学 Vol.40, No. 4）や日本地質学会名誉会員推薦理由（日本地質学会 News Vol.11, No. 7）に詳しく紹介されているので、ここでは筆者の知るもうひとつの横顔を紹介したい。

したがって杉崎先生の全体像は、本文とこれら二つの紹介を合わせてお読み頂く事で、より正しく捉えて頂けると思う。

杉崎先生は、1931年のお生まれで、物理学の坂田昌一先生に憧れて名古屋大学に入学されたと聞く。理学部は一括入試で、学部への進級時に分属学科を決めるのだが、物理で世界の先端をさけるか！と自問し、地球科学を選ばれたようである。それだけに地球科学科に在籍はしていても、物理や化学の先生方や同級生との交流が深かったようである。今年、名古屋大学理学部に在籍された3名の方々がノーベル賞に輝いた。展示資料の発掘に頭を悩ます大学博物館は、関連資料をどなたがお持ちか？の情報源として杉崎先生の人脈に助けられたと言う。

杉崎先生の在学当時は学科対抗の野球が盛んだった。下駄を履いた監督として活躍された杉崎先生必勝のサインは、下駄を脱いだら盗塁！と言われた。人とひと味違うサイエンスの原点は、この辺りにあったのかもしれない。

学位を取られてから、エール大学の Jensen 博士とカリフォルニア工科大学の Epstein 博士のもとで、最先端の同位体地球化学を修められた杉崎先生ではあったが、帰国後、ガスクロマトグラフィにも及ばないガス定量しか出来ない名古屋の質量分析計と三朝や海洋研からどんどん公表される精密なデータを目の当たりにして、装置に頼らない地球化学が出来ないものか、と考えられたようである。

「もし、生成時の化学組成が保存されているなら」元の鉱物に変化して、顕微鏡観察が出来なくても、緑色岩の形成条件や形成場（テクトニクス）がわかるに違いない、と考え始められたのが「地向斜玄武岩」の研究である。その成果は、別の紹介を見て頂くとして、その学会発表後に受けた最も多かった質問は、

「君は、誰と一緒にそのフィールドに行ったのかね！」と「顕微鏡はちゃんと観察したのかね！」であった。名古屋の諏訪兼位先生や水谷伸治郎先生、高知の鈴木堯士先生、九州の勘米良亀齡先生、地質調査所の服部仁さんらにお教を頂きつつ、研究が進んだ。昨今の地質／岩石学の雑誌には、希元素と同位体にしか言及がない論文が沢山載っているが、この風潮をどうお考えであろうか？いずれにせよ、杉崎先生は、40年以前にその源流へ真摯に挑戦されたのである。

Ar を用いた地下水流動の定量化、地向斜玄武岩、層状チャート、頁岩、マンガンノジュール、He/Ar 比による地震予知、断層ガス、マントル有機物と、次々と地質学の空白域を地球化学の手法で埋めて行かれた杉崎先生であったが、それらを次の世代に継続しろとは決して勧められなかった。そこには杉崎先生の二つの思いが横たわっていたように思われる。一つは、「同位体研究」を標榜していた名古屋の地球化学の沈滞であり、もう一つは、太平洋戦争の開戦理由であろう。

杉崎先生は、太平洋戦史が趣味（と言うよりも専門）の一つであったように思える。先生の持論の一つは、「軍における誤った教育」であった。かつての軍の教育では、日清、日露の戦勝の歴史とそのテクニク（戦術）を教え学ぶ事が中心であり、戦争に敗れるあるいは避ける戦略への教育が足りなかった事により、太平洋戦争にのめり込んで行ったという。大学の研究においても然りで、ある一つの成功例（例えば堆積岩の化学組成、同位体、など）にばかりとらわれると、沈滞に向いがちであることをご自身への教訓としておられたのではなからうか。

研究面で口癖だったのは「論文化」である。名古屋の研究は、外国のどこの研究に比べても見劣りはしない、ただ劣っているのは論文化するスピードである、と言われる。筆者の所作と照らし合わせて、なんとも異論が出せない所であった。研究のアイデアは、先生の才能のなせる技として、杉崎先生がもっとも努力されたのは成果の論文化ではなかったらうか。

別に参照出来る紹介（上記）があるとの言い訳で、ここでは杉崎先生の側面ばかりを紹介した。正面からみた地球化学の業績については、以下にその前書きを転載する「杉崎隆一教授論文選集（英文）」が近々 Terra Scientific Publishing Company から出版される予定である。先生の業績が、一部ではあるが取りま

とめられている。印刷部数は多くないが、余裕のあるかぎり差し上げたい（無料）と考えている。ご連絡をいただければ幸いです。

This volume is published to celebrate Professor Ryuichi Sugisaki's 77th birthday, the Joyful Jubilee, which is to be specially congratulated according to our Japanese tradition.

Professor Sugisaki had taught geochemistry and conducted researches at Department of Earth Sciences, Nagoya University, for over 40 years. His research subjects are varied and expansive, crossing over several fields of earth science such as geochemistry, hydrology, tectonic geology, sedimentology, seismology, and applied geology, but always taking geochemical approaches and using his own methods that are quite unique to himself. It is not too exaggerating to say that, with his achievements, he has opened a new phase in earth sciences.

The obtained results through these researches are summarized below: (1) Establishment a measuring method of ground water flow velocity by means of dissolved gases. (2) Disclosure of tectonism of pre-Cenozoic submarine volcanics in the Japanese Islands. (3) Clarification of relation between chemical composition and sedimentation rate of Pacific ocean-floor sediments, and its application to appraisal of depositional environments of chert, shale, and manganese nodule in sedimentary piles on land. (4) Observation of behavior of subsurface gases such as He, Ar, H₂, N₂, CH₄, and CO₂ issuing from active faults, mineral springs, and volcanoes in relation to earthquakes, and its application to earthquake prediction. (5) Discovery of hydrocarbons occluded in igneous rocks and mantle materials. (6) Recognition of cosmochemical significance of shock-induced reaction of carbon bearing materials.

Apart from geochemistry Professor Sugisaki has a life-long passion, which is to read the history of World War II. Analyzing battle strategies he learned, he claims, the importance of being flexible, of not being bound by fixed ideas in decision making, and the same principle should be applied to scientific research.

This volume contains only part of his papers written in English. More than 80 papers, both in English and in Japanese, had to be excluded because of limitation in space. All the papers here are reproduced in photocopy, and they appear grouped together under each research subject.

田中 剛（名古屋大学大学院環境学研究科）

綿抜邦彦名誉会員



2008年度日本地球化学会総会において綿抜邦彦先生が名誉会員にられました。綿抜先生は、これまで長年にわたって水圏の地球化学の研究に携わってこられました。その中でも特に温泉や南極の水系の地球化学研究に努められ、

水質の分析化学に大きな貢献をなされました。世界的稀鉱物である北投石の成因研究は息の長い仕事であり、また研究の特徴を端的に示す仕事の一つであります。また都市環境の観点から沿岸干潟の研究、化学的手法による火山噴火の研究など研究分野は多岐にわたり、それぞれの分野で多くの論文を出されましたが、とりわけ化学教育には力を注がれ、多くの啓蒙書を書いて、平易に野外化学のおもしろさを若い人達に伝えてこられました。その結果、多くの若い学生が地球化学研究に参入するようになりました。これは綿抜先生の特筆すべき業績と考えられます。

綿抜先生は、研究のみならず、環境庁環境保全審議会委員、学術会議陸水研究連絡委員会委員、科学技術庁技術士専門委員などで地球化学の専門性を広く認識させる公的活動をされてきました。日本地球化学会においては、1988～1989年に副会長、1990～1991年に会長を勤められ、会の発展に尽力されました。

綿抜先生は1932年4月5日のお生まれで、1955年3月に東京学芸大学教育学部中等教育学科を卒業後、東京大学大学院理学系研究科化学専門課程へ入学し、博士課程を1960年3月に退学されました。その後、東京大学教養学部助手に任官後、理学博士（東京大学）の学位を取得されました。1965年に助教授になられ、1984年には東京大学教養学部教授とされました。この間、東京大学教養学部の新学科（基礎科学科第二、現広域科学科）の設立に大きく貢献され、物質系計画学講座担当教授として地球環境のゆらぎとサイクルの解析を行いました。現在、地球温暖化が声高に喧伝さ

れていますが、綿抜先生は現状が一方的気温上昇の過程にあるのか、それとも地球が持つ惑星として置かれた制約条件の中で必然的に起こる単なるゆらぎあるいはサイクルの中にあるのかを実証する必要を痛感され、地質学的年代にわたる地球環境の変遷を科学的手段によって抽出する努力を重ねて来られました。

1993年3月に東京大学退官後は、立正大学「経済学部」の教授になられ、経済学を志す学生に環境と経済との繋がりを説く事にご尽力されてきました。再就職先を聞いたときには大変驚きましたが、考えてみるとこの仕事をこなせる化学の先生は、綿抜先生をおいて他にはいないと思われれます。2003年3月に立正大学退職後は、日本温泉協会学術部委員長などを勤められ、変わらず研究に携わっておられます。

このたび、綿抜先生が日本地球化学会の名誉会員になられたことを心からお祝いすると同時に、いつまでもお元気で、学会などの場で貴重なご助言を頂けることを願っております。

松尾基之（東京大学大学院総合文化研究科）

●「柴田賞・学会賞・奨励賞」2008年度受賞者紹介

柴田賞：石渡良志会員（東京都立大学名誉教授）

受賞題目：「現世堆積有機物の地球化学的研究」



石渡良志会員は、1960年に東京都立大学理学部化学科を卒業し、1985年に同教授に就任、2003年に退職するまで、東京都立大学で教鞭をとり、自然界の有機物を対象とする地球化学研究をリードして来られました。

石渡会員が研究を始めた1960年代半ばに関心をもたれていたことは、現世堆積物中で有機物の大半を占める腐植物質をどのように解析するかでした。このために、同会員は赤外吸収スペクトル・元素分析・分子量測定などのマクロな性質の記載から着手し、次いで加水分解、熱分解や酸化分解の方法を適用して、分解生成物から構造を推定する方法論の開発に取り組みされました。ちょうどこの頃、世界的には、ガスクロマトグラフ（GC）、ガスクロマトグラフ質量分析計（GC-MS）など、微量有機化合物の機器分析装置が普及し始め、有機物・有機化合物の地球化学、すなわち有機地球化学が黎明期を迎えつつありました。

石渡会員の功績の第一に、この有機地球化学ならびに有機環境地球化学をわが国の学界に広く紹介し、常

に第一線で日本を代表する地球化学研究者として世界をリードする業績をあげられたことがあります。1971年には、わが国の大学の地球化学研究室としては初めて、ガスクロマトグラフ—質量分析計（GC-MS）を導入し、分子レベルでの地球化学研究を本格的にスタートさせました。石渡会員は、1974年から1年間、UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）のI. R. Kaplan 教授のもとで、客員研究員として現世の腐植物質と石油の先駆物質としてのケロジェンとを結びつける、実験室内加熱実験というアイデアに基づいた研究を展開されています。これはその後、わが国においては、有機地球化学と石油地質学が合流し、地球化学の新しい分野を開拓する契機となりました。腐植物質やケロジェンの生成・変成に関する研究では、地質学の研究者との共同研究を積極的に推進することで、関連する分野からも多くの後継者を輩出して来られました。この実験室実験による現世腐植物質の熱変成メカニズムの研究に対して、米国地球化学会（Geochemical Society）から、1976年度の有機地球化学部門最優秀論文賞を受賞されるなど、国際的に高い評価を得ています。

1980年代に入ってから、上記の腐植物質の酸化分解や熱分解による解析に加えて、化石燃料燃焼にともなう多環芳香族炭化水素（PAHs）、合成洗剤に含まれる未反応炭化水素など、環境汚染物質の分布や動態、湖沼および海洋堆積物中に存在する数多くの生物起源の指標性有機化合物（バイオマーカー）の分子組成と初期続成変化、また環境変動に関する分析化学的研究を精力的に推進され、多くの著作を残されました。

1990年代はじめ、東京都立大学が八王子に移転する際には、海外で次世代の強力な分析機器として開発され、普及し始めたガスクロマトグラフ—燃焼—同位体質量分析計（GC-C-IRMS：分子レベルの炭素安定同位体比測定装置）をいち早く導入されました。GC-C-IRMSは、それまではバイオマーカーとしてもっぱら分子構造から単純に起源を推定して指標化され、しばしばミスリードする結果を与えて来た有機物化合物の起源や変化過程を、炭素安定同位体組成に基づいて、厳密に再評価するものとなりました。石渡会員は、この装置を駆使し、バイカル湖をはじめとする湖沼、日本海などの現世海洋堆積物を対象として、バイオマーカー研究を、第四紀の環境変動を解析する研究で展開されました。

石渡会員は、東京都立大学を退職した現在でも、現役の研究者として学会に出席し、卒業生の残したデータを再吟味して論文として発表されたり、新たな観点で見直し、国際学会で講演発表されています。これまでに約200編の原著論文をはじめ、100編を超える総説・報告書等、数多くの先駆的業績を積み上げて来られました。この中には、海外の代表的な研究者との共同著作も多く含まれています。

石渡会員の功績は研究業績だけにとどまりません。日本地球化学会では、永年にわたって評議員、Geochemical Journal 編集委員、「地球化学」編集長を努められ、1998年から2年間は日本地球化学会会長としてわが国の地球化学の振興と発展に尽力されました。また、このほかに草創期の日本腐植物質研究会（後の日本腐植物質学会）や有機地球化学研究会（後の日本有機地球化学会）の役員や会長を歴任され、日本学術会議では、地球化学・宇宙化学研究連絡委員会委員長ほか研連委員、また国際誌「Organic Geochemistry」の Editorial Board も努められました。

石渡会員の研究に対する情熱は、自身の研究の出発点となった腐植物質（または現世堆積物中のヤングケロジェン）への関心を常に持ちながらも、対象に制限を設けることなく次々に広げ、また新しい解析法や分析法を積極的に取り入れていくというところに大きく現れています。GC-MS にしても GC-IRMS にしても、初期の機器はメンテナンスや調整が非常に難しく、安定して稼働させるには多くの困難がありました。今日のような大容量のデータ記憶装置や、高性能の機器制御ワークステーションはまだありませんでした。そうした中で、数多くの先駆的業績を積み上げて来られたことは、わが国の地球化学研究のパイオニアの一人として歴史に残るものです。今回石渡会員が柴田賞を受賞されたことは、氏の功績を讃えるものであると同時に、有機地球化学の分野の一層の発展を促すことと考え、同じ分野に携わる多くの後進とともに、お慶び申し上げたいと思います。

福島和夫（信州大学理学部）

**日本地球化学会賞：海老原充会員（首都大学東京大学
院理工学研究科）**

**受賞題目：「放射化学的手法による太陽系形成初期に
おける物質進化の研究」**



海老原さんは東京大学理学部化学教室の浜口博先生のもとで卒業研究を開始した際に放射化分析と出会い、1974年に卒業後、引き続き大学院では本田雅健先生の師事を仰ぎ、放射化学的手法に基づく宇宙化学の研究を開始されました。

1979年に学位取得後、間もなくシカゴ大学のエドワード・アンダース教授の研究室で約2年半にわたるポスドク時代を過ごされましたが、このときにまとめられた数々の研究成果の中でも、隕石の微量元素定量分析に基づく太陽系の元素存在度に関する論文（GCA 46 (1982) 2363-2380）は特に有名です。地球化学・宇宙化学の研究において、隕石を中心とする地球外物質は地球を含めた太陽系の初期の情報を保持する唯一の試料です。太陽系形成時に起こった物質の変化を知ることが、宇宙の形成と変遷を理解するうえで重要となります。上記論文に掲載されているデータは、太陽系の進化を物質化学的に研究する基本情報として世界中で広く用いられています。これらの論文を読むと、海老原さんの鋭い洞察力、卓越した実験技術、宇宙化学に対する情熱を随所にうかがうことができます。シカゴ大学でのポスドクを終え、1982年3月に群馬大学に着任されました。その後、1988年4月に現在の勤務先である東京都立大学（現首都大学東京）に異動されています。現在でも学生を率いて自ら車を運転し、東海村の原子力研究開発機構に向われ、放射化分析等を行い、各種隕石・月試料の微量元素を含む化学組成分析による惑星物質の進化研究を継続されています。

海老原さんの一連の宇宙化学研究は国際的に高く評価されており、1991～1994年の4年間にわたり国際隕石学会のカウンシラーを務め、1998年には同学会よりフェローの称号を授与されるなど、日本の宇宙化学の向上・発展に大きく貢献されてきました。研究以外の面でも国内外での活躍は幅広く、国際純正応用化学連合（IUPAC）の委員として約20年の長期間にわたり原子量の改訂に携わる任務、地球外物質の同位体組成に係る委員会の委員長などを務められました。また、多彩な研究の成果を基盤として「太陽系の化学（藁葎房）」や「現代放射化学（化学同人）」をはじめとする

多数の啓蒙書を出版し、宇宙・地球化学研究分野の後進育成へもご尽力されてきました。

私は1992年4月から3年半にわたり、東京都立大学（現首都大学東京）に勤務し、海老原さんの研究室で一緒に仕事をさせていただく機会がありました。この間、海老原さんの幅広い交友関係にあやかり、国内外を問わず、海老原さんを訪ねてこられる数多くの著名な宇宙化学研究者と知り合うことができたのは、今でも貴重な体験となっています。その当時（今もおそらくお変わりなさそうですが）、海老原さんは大学の授業や公務の合間を縫って、多忙ながら海外出張も精力的にこなしておられました。そこには研究における繊細で慎重な行動とは対極の大胆な行動を垣間見ることもありました。ある夏の日、パスポートを忘れたまま早朝に成田空港まで行き、当然ながら搭乗手続きできずに夕方に（何事もなかったかの如く）平然と大学まで戻って来られ、その翌朝に颯爽と旅立たれたことがありました。

実は、海外出張にまつわるエピソードはあと二つほどあるようで、ご本人の名誉を損なわない範囲で紹介したいと思います。ブラジルでの国際学会出席のためのビザ申請にあたり大使館にパスポートを提出していたことを忘れ、目前にさしさまっていた基調講演を行う予定の韓国での国際シンポジウムに出かけようとし、出発当日になってパスポートが手元にないことに気がつかれました。結果として国際会議初日に予定されていた基調講演には間に合わず、キャンセルとなったものの、二日遅れで学会には律儀に参加され、シンポジウム中に開催された分科会での招待講演だけは無事にこなされたようです。

私はここまでしか存じておりませんでした。本稿の執筆前にご本人から以下の自己申告を受けました。せっかくの機会ですので最後につけ足しておきます。「(原文ママ) 先々週、2度あることは3度あるのたとえを身をもって証明しました。インドネシアからの帰り、香港空港で出発ゲート変更を見落とし、かつ、聞き落とし、ゲートが閉まった直後に搭乗口に駆けつけたところ、飛行機は目の前に見えていますが、搭乗できず、結局、翌日の便で帰国しました。その日は空港内のラウンジで過ごしました。香港空港のラウンジにはベッドもあり、食事中華料理が提供され、それなりに快適でした。予定外の出費でしたが、得難い経験をしました。もうこれでおしまいだと信じているのですが。」

このような研究者然としない振り舞いも、周囲の雰囲気と心を和ませ、世代を問わず多くの方々から海老原さんを慕ってやまない由縁の一つと思われる。今後も日本の宇宙化学の発展と後進の育成のために益々のご活躍を期待しております。

日高 洋 (広島大学大学院理学研究科)

日本地球化学会奨励賞：齊藤拓也会員 (国立環境研究所化学環境研究領域動態化学研究室)

受賞題目：「大気および氷床コア試料の精密分析に基づく揮発性有機化合物の地球化学的研究」



齊藤拓也さんは、北海道大学地球環境科学研究科において河村公隆教授の指導の下、大気中揮発性有機化合物の研究を進めて学位(地球環境科学)を取得し、科学技術振興事業団科学技術特別研究員、国立環境研究所 NIES ポス

ドクフェローを経て2007年4月に国立環境研究所の研究員に採用されました。その間、大気中揮発性有機化合物の発生源、輸送・変質過程、過去及び現在の濃度変動に関わる先端的な観測研究を進めてきました。

大学院在学中には、新規に開発した大気濃縮装置を使って海洋大気試料の幅広い分析を行い、光化学オキシダントの生成に関与する非メタン炭化水素の動態を調べました。その結果、北半球中緯度域において放出された炭化水素類が変質を受けながら外洋上まで長距離輸送されている様子を明らかにすることができました。特に博士課程においては、それまでほとんど報告例のなかった非メタン炭化水素の安定炭素同位体比を高精度で測定し、その変化を基に海洋大気中に存在する非メタン炭化水素の輸送時間を定量することに成功しました。これにより、ブタンが輸送時間数日程度のローカルな汚染の影響を強く受けているのに対し、より寿命の長いエタンの平均輸送時間は50日と長く、その濃度分布はリージョナルから半球スケールの大きな輸送を反映していることが明らかとなりました。科学技術特別研究員時代には、研究対象を過去の大気環境へと広げ、氷床コアに閉じ込められた気泡の分析から、自然起源のオゾン破壊物質である塩化メチルの過去の濃度変動を明らかにするための研究を行ないました。それまで、氷床コアを用いた過去の大気微量成分に関する研究は、二酸化炭素やメタンなど大気中に比

較の高い濃度で存在する温室効果気体に限られ、塩化メチルのように大気中濃度が ppb 以下と低い微量ガス成分への応用は遅れていました。そこで、齊藤さんはまず氷床コアから抽出される極少量の空気試料で塩化メチルを測定できるような装置開発を行ないました。この装置を用いて過去 8 万年間に相当する南極氷床コアの分析を行ない、過去 1 万年間の温暖な間氷期において塩化メチルが現在とほぼ同じ濃度レベルで存在していたこと、寒冷な氷期においてはその濃度が間氷期よりも高かった可能性のあることを明らかにしました。この結果は、塩化メチルと過去の成層圏オゾンの消長を考える上で、大変重要な発見です。また、この塩化メチルの主要な発生源の一つである熱帯植物について、温室内の植物から放出される塩化メチルの日変化特性を詳細に調べた結果、塩化メチル放出量は日中よりも夜間に増大するという特異なパターンを示すことを明らかにしました。これは塩化物イオンのメチル化効率に対する環境影響を理解する上で重要な結果です。齊藤さんはこの研究をさらに発展させて、世界で最初の熱帯林における塩化メチルフラックス観測をマレーシアで展開しました。また、NIES ポスドク研究員フェロー、国立環境研究所研究員として、リモートステーションにおける大気中ハロカーボン類の計測にも取り組み、強力な温室効果ガスである PFC-116 のアジアにおける増加傾向を明らかにしました。

このように齊藤さんは大気および氷床コア中の揮発性有機化合物について、次々と素晴らしい成果を挙げてきました。その背景には、装置開発における創意工夫と共に観測・解析における緻密さがあります。一方、大学院時代の後輩である奥様、3 歳のご長男、今年 7 月に誕生されたご長女と楽しい家庭も築かれています。大気中揮発性有機化合物の地球化学については未解明な重要課題が数々あります。公私ともに充実する中、齊藤さんにはさらなる研究の発展と活躍を期待してやみません。

横内陽子（国立環境研究所化学環境研究領域
動態化学研究室）

日本地球化学会奨励賞：谷水雅治会員（独立行政法人
海洋研究開発機構高知コア研
究所）

受賞題目：「重元素の高精度安定同位体分析とその同
位体分別機構に関する基礎的研究」



谷水雅治会員は、1996年に名古屋大学理学部地球惑星科学科の田中剛先生の下で卒業研究を行った後、同大学院理学研究科地球惑星理学専攻の博士前期・後期課程で引き続き同先生のご指導の下で研鑽を積み、2001年に博士（理学）を取得されました。その間、日本学術振興会特別研究員（DC）に採用され、学位取得後も日本学術振興会特別研究員（PD）に再度採用されました。このPDの期間は、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻の平田岳史先生の研究室で一年半ほど過ごされた後に、広島大学大学院理学研究科地球惑星システム学専攻の我々の研究室にも1年ほど在籍されました。その後、海洋科学技術センター（現：独立行政法人海洋研究開発機構）に研究員として移られ、最初は地球内部変動研究センターから高知大学に派遣される形でしたが、のちの改組で高知コア研究所発足時には所属を変更して、現在に至っておられます。谷水さんは、これらの経歴を通じて一貫して重元素の同位体に関わる仕事を継続してこられ、重元素同位体の研究を進める上での代表的な装置である熱イオン化型質量分析計（TIMS）とマルチコレクター型 ICP 質量分析計（MC-ICP-MS）のいずれにも精通した、この分野を代表する若手の研究者です。以下に、こうした谷水さんの研究歴を簡単に紹介します。

谷水さんの同位体に関わる研究人生は、名古屋大学でのセリウム同位体の研究からスタートしています。 ^{138}La - ^{138}Ce 壊変系に基づく地球化学は、やはり希土類元素間の壊変系である ^{147}Sm - ^{149}Nd 系に比べ圧倒的に研究例が少ないのが現状です。その原因は、親・娘核種の同位体存在度が低く半減期が長いために、測定が困難で同位体比変動が小さいことにあります。谷水さんは、従来よりも少ない試料量で再現性の高いセリウム同位体比測定法の確立を目指しました。その結果、ダイナミックマルチコレクター方式を適用することで、従来より約一桁弱いイオンビーム強度で、同等の精度・再現性を得ることに成功されました。セリウム同位体比は CeO^+ として通常は分析されますが、測

定中の $^{18}\text{O}/^{16}\text{O}$ 同位体比を正確に逐次モニターすることで、精度だけではなく高い再現性を得ることが可能となりました。谷水さんは、この分析面での進歩を武器として、 ^{138}La の β^- 壊変の壊変定数を地球科学的に決定する研究、ユークライト隕石の各組織の年代を様々な年代測定法で決定した研究、Ce 同位体比による月岩石中の La の枯渇の起源に関する研究、など多彩な応用研究を行われました。この時期に分析計から出てくる同位体データについて深く吟味を行ったこと、よりよい分析法の確立のためにハードウェアの性能を最大限に引き出す努力をしてきたことが、その後の谷水さんの研究を形作ったといえると思います。

東工大では、移動と同時に本邦初の第二世代の MC-ICP-MS が導入され、その性能の検証と同時に重元素の安定同位体の研究に着手されました。MC-ICP-MS は TIMS と並ぶ高精度同位体分析装置として注目されていましたが、TIMS と比べて登場からの日が浅く、いろいろな問題と可能性を秘めていました。そのような時期に質量分析計内で起こる質量差別効果の実験的理解に関心を持たれたことは、同位体比分析そのものにこだわりのある谷水さんならではのことでしょう。谷水さんは MC-ICP-MS で大きな質量差別効果が見られる点に着目し、その原因を実験的に追究されました。特に、MC-ICP-MS にダブルスパイク法を初めて導入し質量分析計の校正を試み、イオン化効率が約70%と低い亜鉛について確度の高い同位体測定を行い、ICP-MS のイオン源では質量差別効果が起きないことを立証した点は、その後の質量差別効果の理論的解釈に大きなインパクトを与えました。また同時に谷水さんは、従来報告されている亜鉛の同位体存在度の誤りを指摘し、この事実は2005年に欧州標準局 (IRMM) により追認され、その後 IUPAC が亜鉛の同位体存在度、さらには亜鉛の原子量を見直すきっかけを作りました。

こうした谷水さんの同位体へのこだわりは、幸いにも谷水さんと私の出会いにもつながりました。そもそものつながりは、アポロ月試料のセリウムの価数を放射光を用いて分析するために試料を提供して頂いたことに遡りますが、東工大での研究の後で、化学反応素過程に基づいて同位体分別を理解することを目指して、広大に移動して下さったのです。既に重元素同位体分析のホープとして知られていた谷水さんが私のようなところに来て下さったことは、私にとっても望外の喜びでした。その研究計画を伺った時の着眼点の良

さに、新鮮な感動を受けたのを今でも覚えております。既に谷水さんは、この重元素の反応素過程と同位体分別の関係についても、ユニークな論文を発表していますし、元素の化学種解析に基づく地球化学は谷水さんの現在の研究のキーワードのひとつにもなっているようです。

谷水さんの存在は、我々の研究室を大いに活性化してくれましたが、高知大学に導入されたこれまた本邦初の第三世代の MC-ICP-MS 装置である Neptune (=海の神、男性ですが) がほどなく谷水さんを奪っていきました。高知に移られてからの谷水さんは、まさに八面六臂の活躍です。まず手始めに、TIMS 分析では困難な点があった鉛同位体比の分析について、MC-ICP-MS による高精度迅速分析手法を確立されました。谷水さんの手法は、高精度鉛同位体分析への高いハードルをできるだけ低くし、質を確保しながらも、経験の浅い学生・研究者が自らの手で分離から測定までをこなせるよう工夫されています。装置が完全に稼働するまでにはいろいろなトラブルに見舞われ、国内ではメーカーも含めてデータの蓄積が無くその解決法がなかなか得られず、頻繁にドイツ連邦プレーメンの装置開発責任者と電子メールのやり取りをしたと伺っています。こうした努力の結果、国内では鉛同位体を分析できる拠点が少ないこともあり、多くの研究者が南国詣でにでかけるようになり、高知コア研究所は日本の重元素同位体分析のコア (核) になりつつあります。その原動力が、同位体分析やそのための元素の分離実験などにおける谷水さんの卓越した技術と経験に対する信頼感であることは間違いありません。その後は、多彩な共同研究を行いながら、重元素の同位体が絡んだ様々な研究テーマに挑戦しておられます。また地球化学会と関連の深い日本質量分析学会同位体比部会を高知で2005年に開催する際には、その運営責任者の重責を担いました。

このように、谷水さんは既に日本の重元素安定同位体科学の中心メンバーとなっています。じかに谷水さんと接してみると、研究ばかりでなく日常のあらゆることに対して、物事の本質を捉え、合理的に対応していく力にいつも驚かされます。そんな資質を生かして、同位体をキーワードに様々な境界領域に挑戦し続ける谷水さんが今後どんな研究を展開して下さるのか、とても楽しみです。

高橋嘉夫 (広島大学大学院理学研究科)

日本地球化学会奨励賞：平野直人会員（東北大学東北
アジア研究センター）

受賞題目：「沈み込む海洋プレート上の新タイプ火山
活動の発見とメカニズムの解明」



平野直人博士は1973年、横浜市旭区でお生まれになりました。受賞講演の時にご幼少の頃の写真を紹介いたしました。たいへん凛々しく、かわいらしい坊やだったようです。高校卒業後は山形大学理学部地球科学科に進み、齋藤

和男先生の研究室で年代測定を学び、地球化学者として第一歩を歩み出しました。修士課程、博士課程は筑波大学地球科学研究科に進学し、小川勇二郎先生のもとで海洋底科学やテクトニクスの面白さを学び、博士の学位を取得しました。さて、ここから平野さんの長い長い渡り歩きの歴史が始まります。平野さんもご多分にもれず学位取得後のポストクの口を得るために日本学術振興会の博士研究員に応募しましたが、三年連続で振られ続け、四年目にして晴れて採用されました。学位取得後、東大海洋研、東大地震研、東工大、カリフォルニア大学スクリプス校、東大理学系、金沢大などを転々とし、合計7年半あまりのポストク生活を送りながら研究を進めて来られました。

平野さんはこれまで海底噴出岩の年代測定と化学組成から、海洋底および海洋プレートの進化を論じてきました。特に Ar-Ar 年代測定をはじめとし、主要元素および微量元素組成や同位体組成など、研究テーマに沿った様々な地球化学的手法を積極的に取り入れて来た点に特徴があります。平野さんのこれまでの研究の中で、もっとも注目度の高い研究は「プチスポット」の発見です。プチスポットは北西太平洋（三陸沖・鹿島沖）、日本海溝などにみられ、プレートの屈曲域の割れ目からマグマが上昇する火山で、これまで知られていたプレート発散境界型、プレート収束境界型、ホットスポット型とは全く異なる第4の火山という概念を提案しました。この報告は Hirano *et al.* (2006) としてサイエンス誌に掲載され、全世界でいっせいに報道されました。平野さんがこのような大きな仕事を成し遂げることができたのは、地道な作業の中にも大胆な仮説を立て、それを地球化学に立脚した綿密なデータに基づいて、実証的に論じるという彼の研究スタイルに起因するのではないかと思います。

平野さんは大変気さくな、心の温かい人物で、その

気取らない人柄は研究を進める上でも活かされています。「プチスポット」研究では、独自性を失うことなく、史上最年少の調査航海主席研究員という苦難を乗り越えながら、地質学、岩石学、地球物理学、古生物学などの多岐にわたる分野の研究者とともに、共同研究を進めてきました。1年3ヶ月という短い間でしたが、私たちの研究グループにもポストクとして在籍してくれ、学生さん達の良き兄貴分として存在感を發揮していました。もっとゆっくりしてくれて良かったのですが、金沢大学に立ち上がった新しいプロジェクトから請われ、ポストクとして異動して行きました。学位取得後、6カ所目の研究室となりますが、35歳という年齢から考えて、もうそろそろ職に就いてもらわないと、と私も気になり始めました。研究者としても教育者としても人間としても魅力あふれる平野さんがパーマネントの職に就けないとしたら、日本の地球科学の世界はどこかおかしいのではないだろうか、と私は最近思うようにまできました。彼は数え切れないほどの公募に応募し、幾度となく最終面接に呼ばれましたが、なかなかオンリーワンになれませんでした。

そんな平野さんが晴れて12月から東北大学東北アジア研究センターに助教として採用されることになりました。何度目の正直でしょうか？これまでに彼は多くの方々にお世話になりましたが、これでひとまず落ち着いて仕事にますます磨きをかけてもらえればと思います。

平野さんのホームページを見ると、「専門分野：なし」と書かれています。これは専門分野という枠に縛られることなく、自由なスタイルで研究を進めていこうという彼の意思の表れかと思います。しかしながら学部から数えて8カ所も研究場所を変えながら、軸足がぶれることなく「平野スタイル」で一貫して研究を進めてこられました。近年、研究者の流動化が強く奨励されていますが、彼ほどそれを身をもって進めてきた人はいないかと思います。私も彼に倣って真摯に研究と教育に臨んで行かなくては、と思っています。奨励賞受賞と就職の二重のおめでた話を心からうれしく思います。三つ目のおめでた話を聞けるのを心待ちにすることにしましょう。これからもよき仲間として、若手研究者のホープとして、ますます活躍してくれることを期待しています。

鍵 裕之（東京大学大学院理学系研究科）

●「柴田賞・学会賞・奨励賞」2009年度受賞候補者推薦の募集

応募期限2009年1月31日(土)

日本地球化学規定により、柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記をご参照の上、会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を、自薦他薦を問わずご推薦下さいますようお願いいたします。

候補者の資格

- (柴田賞) 地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあった者。
- (学会賞) 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。
- (奨励賞) 地球化学の進歩に寄与するすぐれた研究をなし、なお将来の発展を期待しうる本会会員。受賞者の年齢は2009年4月1日において満35才未満である(誕生日が1974年4月2日以降である)ことを要する。
- (功労賞) 我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し寄与のあった者または団体。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦者を**2009年1月31日(土)**までに庶務幹事へ提出する(消印有効)。

提出先：小畑 元 (庶務幹事)

〒164-8639 東京都中野区南台1-15-1
東京大学海洋研究所海洋化学部門海洋無機化学分野
Tel：03-5351-6449, Fax：03-5351-6452
E-mail：affairs@geochem.jp

推薦の書式は、会員名簿(2007年度版)のハンドブック(71ページ)に記載されています。これをコピーして使用するか、同様の書式をワープロ等で作成して使用して下さい。また、同様の書式は学会ホームページからもダウンロードできます。この件についてのお問い合わせは、本会庶務担当幹事(上記)までお願いします。

●2009年度第1回鳥居基金助成の募集

2009年度第1回鳥居基金助成の応募の締め切りは2009年1月31日となります。本学会ホームページに応

募要項がありますので、ご参照の上、応募書類を提出して下さい。なお今回の助成の対象は、2009年4月から2010年3月までの1年間に実施される海外渡航及び国内研究集会となりますのでご注意ください。

申請手続

応募者は、Vol.41特別号(会員名簿)の88、89ページに掲載されている申請書((1)-Aまたは(1)-B)を所定の期日までに下記に提出して下さい。(同様の書式は学会ホームページからもダウンロードできます)。参考となる資料(海外派遣については業績リストおよび学会参加の場合は学会概要等、国内研究集会については集会の案内・概要等)を添付して下さい。なお、海外渡航により国際学会等での研究発表を行う場合は、申請書の「研究の目的」欄に、渡航にあたっての抱負や発表する論文の内容・重要性などを記載して下さい。また、海外派遣に関しては、他の研究助成金との重複受給は認められておりませんので、ご注意ください。

提出先：小畑 元 (庶務幹事)

〒164-8639 東京都中野区南台1-15-1
東京大学海洋研究所海洋化学部門海洋無機化学分野
Tel：03-5351-6449, Fax：03-5351-6452
E-mail：affairs@geochem.jp

学会評議員会議事録

●2008年度第2回(メール会議)

本議事録は、2008年6月11日にメールで発議した第2回評議員会の内容を中心としているが、本年度第1回評議員会(2月16日)後、第2回評議員会終了(7月30日、以下日付については、(7.30)のように括弧内の数字で示す)までに、電子メールにて実施された評議員間での情報交換と審議の内容も含む。

電子メール送信先：蒲生俊敬会長、海老原充副会長、石橋純一郎、小畑元、佐野有司、鈴木勝彦、角皆潤、平田岳史、益田晴恵、南雅代(以上幹事)、天川裕史、岩森光、鍵裕之、北逸郎、瀧上豊、中塚武、奈良岡浩、野尻幸宏、日高洋、松尾基之、松本拓也、三村耕一、柳沢文孝、坂本尚義(以上評議員)

1. 2007年度第4回評議員会議事録の承認
小畑幹事から2007年度第4回評議員会議事録が提

案され (2.25), 承認された (3.31)。

2. 2008年度第1回評議員会議事録の承認
 小畑幹事から2008年度第1回評議員会議事録が提案され (4.15), 承認された (5.7)。

3. 報告事項

(1) 庶務 (小畑幹事): **【科学研究費補助金】** (日本学術振興会) 平成20年科学研究費補助金研究成果公開促進費「定期刊行物」(GJ) 交付内定 (4.11)・交付申請 (5.8) (4,200千円)。 **【研究助成等】** 2008年第1回鳥居基金助成, 採択: 竹谷裕 (TE-58), 交付手続開始 (条件付採択の2件は辞退) (4.26)。 **【後援・共催等】** (協賛) IUMRS アジア国際会議 2008 (Materials Research Society of Japan 主催)。 **【その他】** Web 広告の追加募集 (2.20); 故半田元会長への供花 (3.16); 「地球化学」への広告追加分受付 (3.26); 梶国際文献印刷社と平成20年度業務委託契約 (4.16); GJ 賞楯製作 (5.1)。 **【幹事会】** 2008年5月31日13:00~18:00 (東京大学理学部化学東館0202号室) 第2回評議員会の議事内容について整理した。(出席: 蒲生・海老原・石橋・小畑・佐野・鈴木・角皆・平田・益田・南の各幹事)

(2) 会計 (南幹事, 6.11): 2008年1~5月までの会費収入と主な支出について報告があった。

(3) 会員 (角皆会員幹事, 6.11): 2008年2~4月の会員異動について報告があった。

【入会】
 (2月)
 一般会員

9282475 佐川拓也 サガワタクヤ
 高知大学海洋コア総合研究センター

9282511 向井 浩 ムカイヒロシ
 京都教育大学教育学部理学科

9282509 村上雅紀 ムラカミマサキ
 東京大学理学系研究科地球惑星科学専攻

9282510 清水健二 シミズケンジ
 独立行政法人海洋研究開発機構地球内部変動研究センター

学生会員 (学生バック)

9282513 古川善博 フルカワヨシヒロ
 東北大学大学院理学研究科地学専攻地球惑星物質科学科

(3月)
 一般会員

9282506 PINTI, DANIELEL

Universite du Quebec a Montreal Sciences de la Terre et de l'Atmosphere

9282517 穂刈利之 ホカリトシユキ
 清水建設株式会社技術研究所
 学生会員 (学生バック)

9282514 中川裕介 ナカガワユウスケ
 京都大学大学院理学研究科化学専攻 水圏環境分析化学研究室宗林教授
 (4月)
 一般会員

9282516 上野雄一郎 ウエノユウイチロウ
 東京工業大学グローバルエッジ研究院

9282518 中村謙太郎 ナカムラケンタロウ
 独立行政法人海洋研究開発機構地球内部変動研究センター 地球内部試料データ分析解析研究プログラム
 学生会員 (学生バック)

9282515 上野振一郎 ウエノシンイチロウ
 名古屋大学大学院環境学研究科都市環境学専攻 星野研究室

9282520 三好陽子 ミヨシヨウコ
 九州大学大学院理学府地球惑星科学専攻 無機生物圏地球化学研究室

9282521 澤野真規 サワノマキ
 北海道大学大学院環境科学院地球圏科学専攻 環境地球化学研究室 (河村公隆教授)

9282522 田中浩史 タナカヒロシ
 名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻

【退会】
 (2月)
 一般正会員

7280100 平林順一
 学生正会員

8281878 寺島聡美

9282397 武田匡樹

9282398 中尾俊夫

9282399 竹内ふみ

9282406 岡崎寛大

9282416 深澤 真

9282417 内山嘉子

9282421 若林貴弘

9282432 徳竹大地

9282433 小林紗由美

(3月)

シニア正会員

0280091 半田暢彦 2008/3/15逝去

一般正会員

1282069 藤谷直樹

6282309 JO, HYUN-JA

9282454 沢 康正

学生正会員

9282352 井上 綾

(4月)

シニア正会員

9281202 佐藤キエ子

一般正会員

0280206 亀井伸一

学生正会員

9282439 任 忠完

【変更】

(3月)

会員番号 会員名 変更前 変更後

1282263 若木重行 学生正会員 一般正会員

9282331 早津岳宏 学生正会員 一般正会員

9282350 高橋貴文 学生正会員 一般正会員

(4月)

0282282 野口拓郎 学生正会員 一般正会員

1282285 白井直樹 学生正会員 一般正会員

3282214 玉置美奈子 学生正会員 一般正会員

6282332 入澤啓太 学生正会員 一般正会員

7282324 関本 俊 学生正会員 一般正会員

9282401 中村真仁 学生正会員 一般正会員

2008年4月30日現在の会員数

	正会員	(一般)	(学生) 通常	(学生) 修士バツ	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(海外会員)
2008.1.31	918	(746)	(81)	(34)	(57)	11	9	938	(37)
入会		+8		+6					+1
退会		-5	-12		-2				-1
種別変更		+9	-9						
自動移行			+0	-0					
海外へ移住									+3
海外より帰国									-1
2008.4.30	913	(758)	(60)	(40)	(55)	11	9	933	(39)

(4) 編集:

a. GJ (佐野幹事, 6.11): 1月より5月15日までの編集状況について説明があった。47の論文の投稿があり, 受理2報, 却下11報, 残りは査読中との報告

があった。

b. 地球化学 (益田幹事, 6.11): 2008年度の編集状況について。2008年度1~5月に16編の原著論文を受付, うち8編が受理, 7編が審査中, 1編が却下となっている。総説は3編を受付, うち3編を受理した。その他として, 追悼記事を2編受付, 受理した。また, 投稿時の問題について編集委員会で議論し, 「編集委員長からのお願い」を地球化学ニュース, メーリングリスト, 日本地球化学会のホームページに掲載した。

c. ニュース (石橋幹事, 6.11): ニュースレター No.192の発行 (3.20), No.193を編集中との報告があった。また, ニュース電子メール版, 2008 No.21~68まで48件の発信を行ったとの報告があった。

d. 広報 (鈴木幹事, 6.11): 第2回広報委員会 (東大地震研) についての報告があった (小木曾, 折橋, 橋, 山本, 鈴木各委員)。広報委員会として以下の活動を行うこととなった。年会でのプレス発表, ホームページの充実, 連合大会, ゴールドシュミット国際会議での広報強化, アジア地区への広報, パンフレットの改訂など。

(5) 行事:

a. 2008年日本地球惑星科学連合大会 (平田幹事, 6.11): 日本地球惑星科学連合2008大会 (5.25~30, 幕張メッセ国際会議場) についての報告があった。地球化学会が共催するセッションは, 「固体地球化学・惑星化学セッション」(C104: 代表コンピーナ下田会員), 「非質量依存同位体効果: 新しい同位体地球化学に向けて」(C203: 代表コンピーナ角皆会員) の2件。パンフレットデスクを設置, 日本地球化学会のパンフレットやショートコースのパンフレットを配布した。

b. 2008年ゴールドシュミット国際会議 (平田幹事, 6.11): 2008年ゴールドシュミット国際会議 (7.13~18, カナダ・バンクーバー) についての途中経過の報告。学生旅費援助の目的でUS\$3,000相当を共催金として支出した。日本地球化学会のパンフレットを会議参加者バッグに入れ配布するとともに, Exhibition ブースを設置する。GJ賞の授賞式をプレナリーセッションで行う予定。日本地球化学会会員に対する登録料の割引等の措置はないこととなった。なお, 2009年はスイス・ダボスで6.22~26に開催予定。

- c. 2008年日本地球化学会年会準備状況（松尾評議員，6.11）：2008年の日本地球化学会第55回年会は，東京大学駒場キャンパスにおいて開催予定（2008年9.17～19）。組織委員長（代表者）は松尾基之会員，実行委員長は野津憲治会員。セッション名，コンピーナ名，セッションの簡単な説明がホームページ上で発表（5.19）。講演申し込みと要旨提出を同日に行う（7.14）。
- d. 第3回ショートコース（平田幹事，6.11）：日本地球化学会年会にあわせ，会期前日（9.16）に第3回ショートコースを開催予定。ホームページを開設し，受付を開始。プログラムについて説明があった。定員50名，参加費は3,000円（日本地球化学会会員は学会から2,000円の補助有）。
- (6) 各種委員会：
- a. 鳥居基金選考委員会（野津委員長より提案，3.11）：2008年度第1回鳥居基金に6件の申請（海外渡航4件，国内研究集会2件）があり，「2008年度地球化学若手シンポジウム（竹谷裕会員）」を国内研究集会として採択した。また，国内研究集会1件，海外渡航1件は条件付採択（他の助成金が得られた場合は辞退する）とした。
- b. 広報委員会（蒲生会長より報告，4.2）：広報委員会の活動をより推進するため，下田玄会員及び松本拓也会員が新たに広報委員となった。
- c. 日本地球惑星連合各種委員会の活動状況について（6.11）：国際対応委員会について，佐野評議員からアジアオセアニア地球科学会議（AOGS）を2010年に日本に誘致しているなど現状についての報告があった。教育問題検討委員会について，瀧上評議員から国際地学オリンピック日本委員会の現状などについて説明があった。
- (7) 連合関係：
- a. 日本地球惑星連合第7回（拡大）評議員会報告（6.11）：第7回（拡大）評議員会に日本地球化学会から，天川評議員，鍵評議員，野尻評議員，岩森評議員が出席。連合の法人化について意見交換が行われた。
- b. 日本化学連合関連（6.11）：平田幹事から第1回日本化学連合シンポジウム「次世代の化学を担う人材」について報告があった。また，蒲生会長から平成20年度第1回理事会・評議会合同会議についての報告があった。
- (8) IAGC 関連（海老原副会長，6.11）：IAGC 対応小委員会の平成20年度の活動について報告があった。また，IAGC の council に益田評議員が推薦されることになったとの報告があった。
- (9) 「地球と宇宙の化学事典」について（蒲生会長，6.11）：「地球惑星化学の事典（仮題）」（朝倉書店）の編集・出版計画について蒲生会長より経過報告があった。書名は「地球と宇宙の化学事典」とすることとし，編集委員会の共同委員長を蒲生会長，海老原副会長で引き受けることとした。
- (10) その他：蒲生会長より，平成20年度科学研究費補助金研究成果報告促進費「定期刊行物」の交付と入札について報告があった（6.11）。
4. 審議事項
- (1) 会員の異動について（角皆幹事）：2，3，4月の入退会が電子メールで提案され（3.4，4.10，5.21），それぞれ承認された（3.31，5.7，6.11）。また，3月末に届いた退会希望申請については退会を認めることが承認された（5.7）。
- (2) 2008年度学会賞等選考委員会（塚本委員長）：GJ賞最終候補「M. Hamada and T. Fujii. “H₂O-rich island arc low-K tholeiite magma inferred from Ca-rich plagioclase-melt inclusion equilibria.” *Geochem. J.*, Vol. 41 (6), 437-461 (2007).」が選考委員会より提案され（2.23），受賞者として承認された（3.31）。また，柴田賞候補2名，学会賞候補2名，奨励賞候補6名について委員会が選考を行い，最終候補者が提案された（5.12）。柴田賞を石渡良志会員に，日本地球化学会賞を海老原充会員に，日本地球化学会奨励賞を齊藤拓也会員，谷水雅治会員，平野直人会員に授与することが承認された（5.27）。
- (3) 2007年度決算について（南幹事，6.11）：小畑前会計幹事から2007年度決算について報告があった。2007年度は，2006年度に比べ赤字を圧縮できたが，単年度では54万円の赤字となった。GJ出版助成金額は今後もさらに減少すると予想されるため，GJ電子化を含めた対応策を実施していく必要があるとの報告があった。この内容について審議が行われた。
- (4) GJの冊子体を受け取らない会員について（小畑幹事）：2007年度総会において，希望する会員にはGJは電子体のみを渡し，冊子体を送付しないシステムを設けることが承認された。このシステム構築を進める具体的な手順が提案され（6.11），承認さ

れた (7.30)。

【今後の予定】

2008年第3回幹事会：9月6日(土)

東京大学海洋研究所 13:00から

2008年第3回評議員会：9月16日(火)

東京大学・駒場キャンパス 13:00から

2008年日本地球化学会総会：9月18日(木)

東京大学・教養学部



研究集会報告とお知らせ

●鳥居基金助成実施報告

2007年度第2回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-57)

氏名(所属)：高橋 浩(産業技術総合研究所)

助成：国内研究集会

課題：火山性流体討論会2008

火山性流体討論会は、火山ガス・熱水・マグマ・超臨界流体・地下水等の観測やモデリング等の話題を中心に討論するため、年に一度開催されています。討論会のモットーは、発表・討論の時間を長めにとり、参加者全員が発表することです。今年は鳥居基金の助成を受けて、学生の参加に対する経済的な負担が減ったためか、例年よりも多くの参加者の申し込みがありました。参加者が多いことは喜ばしいことなのですが、長時間の討論と全員の発表は両立できず、やむを得ず、中堅以上の参加者には、時間をゆずってもらい、若手へのするどい質問やツッコミ(愛のムチ)に専念していただきました。

討論会は、2008年6月6日(金)～8日(日)の日程で、茨城県常総市のあすなろの里を会場として、合宿形式で開催しました。梅雨入りが例年よりも少し早く、天候が心配だったのですが、期間中、天候が崩れることもありませんでした。参加者は、学部生1、院生9、PD6、若手研究員7、中堅以上10名と、全体の2/3程度が若手で占められました。発表数は21件で、学生は40分、若手研究者は30分の持ち時間で討論を行いました。ここ数年は夜間の会場使用が難しく、夜を徹しての討論ができないこともあり、1人の持ち時間が短くなってしまうのが残念なところ。学会発表とは



写真1 参加者集合写真



写真2 討論会の一コマ

違って、発表の途中でも質問できるような方式を採用していますが、今年の参加者は奥ゆかしい方が多かったのか、発表を遮った質問の数は多くありませんでした。それでも、発表後には討論が盛り上がり、持ち時間のオーバーが続出してしまい、総合討論や休憩時間を減らしてようやく乗り切ることができました。

また、レクレーションとしてサッカーやテニスをしたり、バーベキューや消灯前の懇親会を行ったりしました。さらに、余興として、参加者が所属するJAZZバンドの演奏もありました。こういった課外活動的なプログラムによって、参加者の親睦が深まったことは確かです。これまでの討論会で知り合った参加者同士が、次の他の学会などで再会したときに、すぐにうち解け合う光景を何度か目にしています。

全てのプログラムが終了した後に、今後の討論会の運営について意見を出してもらい、新規参加者をどう募っていくのかということが問題だという指摘がありました。参加メンバーが固定化してしまうことは問題なのですが、参加者が増えすぎると、ひとりあたりの

持ち時間の短縮や全員発表の原則が崩れるといった対応を取らざるを得ず、会の開催主旨が保たなくなってしまう。という二律背反の問題を抱えており、これを解決するためには、夜間セッションが可能な会場を確保するなど金銭的な負担が増えることが予想されます。このような状況下で、鳥居基金の存在意義は大変大きく、今後も同種の援助事業の継続を期待しております。ともあれ、今年の火山性流体討論会を成功裏に終えることができたことは、ひとえに鳥居基金の援助による。と幹事として感じております。ここに謝意を表します。

●日本地球惑星科学連合2009年大会のお知らせ

2009年連合大会は、地球惑星科学関連学会大会から数えて20回目の開催になります。2009年連合大会が、高度に専門化された諸研究分野の成果の上に成り立つ総合科学としての「地球惑星科学」の研究発表の場、情報交換の場として、いっそう充実したものになるよう期待しております。

期間：2009年5月16日(土)～21日(木) 6日間

会場：幕張メッセ国際会議場（千葉県）

**詳細は大会ホームページ

<http://www.jpogu.org/meeting/>をご覧ください。

皆様のご参加、ご提案を心よりお待ちしております。

ご不明な点は、ご遠慮なく下記事務局まで御問合せください。

〈日本地球惑星科学連合事務局〉

Tel：03-6914-2080, Fax：03-6914-2088

E-mail：office@jpogu.org

URL：http://www.jpogu.org/

以下は地球化学会主催セッションの紹介です。

レギュラーセッション「固体地球化学・惑星化学」

2001年の合同大会以来、レギュラーセッション「固体地球化学・惑星化学」を開催しています。来年度も開催しますので、多くの方に参加して頂くことを希望します。このセッションは、隕石や地球物質等の天然試料や実験生成物に対し、化学組成や存在形態、同位体比を用い、地球で発生する様々な過程、惑星の進

化、太陽系の成因等、過去46億年間で起こった現象について多角的に議論することを目的としています。地球化学に限らず、地質学、岩石学など複数の分野からの講演者が集まる学際的なセッションを目指しています。また、大学院生を含む若手研究者、他学会の研究者が自由に討論できる雰囲気作りに努めたいと思います。多くの方が、特に若手の方に是非参加していただければと思います。ご意見等ありましたら、下田玄 (h-shimoda@aist.go.jp)、鈴木勝彦 (katz@jamstec.go.jp)、山下勝行 (kty@misasa.okayama-u.ac.jp)、松本拓也 (takuya@misasa.okayama-u.ac.jp) までお寄せ下さい。

スペシャルセッション「地球化学図の新展開を探る：環境、資源、研究、教育」

『地球化学図』へ再評価の機運が高まりつつあります。元来、地球化学図は鉱床探査手法のひとつでしたが、環境問題が注目を浴びるにつれ、土壤汚染評価やその基礎となるバックグラウンドを表すベースラインマップとしての要望が高まりました。最近では、多元素の分布状態が、国の元素インベントリ評価に繋がる元素戦略情報として期待されています。地球惑星科学はフィールド教育が重要ですが、地球化学図は、フィールド—分析—数値解析、の3拍子が揃った教育ツールとしても重用されています。研究面でも、単なる元素存在度に留まらず、状態分析、同位体分析などをからめた解析がすすめられているようです。

『地球化学図』に定義はありません。このセッションでは、多くの大学や研究機関でその試みが始まった地球化学図関連の情報を持ち寄り、手法、意義、目的、解析、などなど、その環境、資源、研究、教育にからめた多様性を学びあうことを目的にしています。このセッションは、ポスターのみですが、発表者一人当たりのポスター面積は一般の2倍、を予定しています。発表はされなくとも、ふらりとお立ち寄りいただき、じっくりとひやかせる雰囲気をめざしています。

ご意見などがありましたら、名古屋大学 田中剛 (tanakat@nagoya-u.jp)、産総研 今井登 (noboru.imai@aist.go.jp) までお寄せください。

●ゴールドシュミット国際会議2009のお知らせ

Goldschmidt™ 2009. “Challenges to Our Volatile Planet”
June 21-26 in Davos, Switzerland

Welcome to Davos and the 19th V. M. Goldschmidt™ conference. This year the conference focuses on past, contemporary and future challenges to the Earth's resources and environment. The 20 themes and well over 100 sessions will be joined by high-profile speakers and compelling panel discussions to highlight the future of geochemistry in its global context.

Set in the breathtaking mountain landscape of the Grisons Alps and located within easy reach of accommodation, shops and restaurants, the Davos Congress Centre has over 35 years of experience in hosting international congresses, including the very successful Goldschmidt 2002. Reliable public transportation connects Davos to transport hubs in Switzerland and the rest of Europe. With over 20,000 beds in accommodation there is something to suit every budget, from self-catering to 5* hotels, and nearly 100 restaurants serving Swiss and international cuisine.

Goldschmidt™ 2009 brings together over 2000 of the world's international experts in the chemistry of the Earth to present and debate breaking new work across these topics. It will be held in the Congress Center in Davos. This was the venue for the very successful 2002 meeting, and the Congress Center has now been enlarged in part to be able to accommodate conferences as large as ours.

All those who attended the 2005, 2006, 2007 or 2008 Goldschmidt™ Conferences will automatically receive the circulars for Goldschmidt™ 2009. However, if you did not attend these meetings, you can add your address to the list to make sure you receive all the conference information as it becomes available.

We look forward to welcoming you back to Davos in June 2009.

<Date and Deadlines>

November 1st, 2008 List of Sessions finalised
January 1st, 2009 Abstract Submission and On-line Registration opens
February 22nd, 2009 Abstract Deadline (23:59 UTC)
May 22nd, 2009 Early Registration closes
June 21-26, 2009 Goldschmidt 2009 in Davos, Switzerland

(Reprinted from homepage of Goldschmidt 2009: <http://www.goldschmidt2009.org/index>)



地球化学の現場 No. 2

株式会社セレス 環境部

小池祐一

(<http://www.ceresco.jp>)

「今のお仕事の内容を簡単にご説明ください」

株式会社セレス我孫子事業所の環境部に勤務しています。株式会社セレスは財団法人電力中央研究所（以下、電中研）の協力会社で、電力や電中研からの委託業務、その他公的機関、民間からの業務などを請け負っています。私の所属する環境部では環境調査などのフィールドワークおよび化学分析業務などを行っています。

私は、化学分析部門の専門家として、環境計量証明事業の立ち上げや土壌汚染調査に携わると同時に、学生時代の研究テーマであった海洋調査業務などに従事してきました。ただ、今年の4月に環境部長に就任し、現場に出る機会が減ってしまいました。

「よろしければ、今のキャリアを選んだ経緯をお話ください」

私は、近畿大学理工学部化学科4年生のときに地球化学研究室を希望、配属となり地球化学の世界に足を踏み入れることになりました。昔から船が好きで、よく祖父に連れられて港に船を見に行っていたこともあり、研究室紹介時に先輩が乗った白鳳丸航海のスライド（当時はスライドが主流でした）を見たときに、この分野に進もうと決めました。研究室に入った時点



写真1 英国船「チャールズダーウィン号」によるインド洋航海 集合写真
(左から3人目が筆者)

で、大学院まで進むことを教授に伝えていたため、研究テーマ（主な研究テーマは、「微量金属元素が赤潮プランクトンの増殖に与える影響」でした）を含め色々な面で優遇？されていたのか、研究船への乗船機会を与えられ、学会の年会にも4年生から参加していました（ちなみに初めて参加した年会は1988年に広島大学で開催された地球化学会の年会でした）。その後、博士課程まで進み研究職を探していましたが、当時はなかなか就職先がなく、結局1年間大学に残った後に、化学関係の専門学校に講師として就職することになりました。

専門学校に4年間お世話になったのですが、やはりフィールドワークの魅力（特に海や船の魅力）から離れられず、先生や先輩方、友人にいろいろと打診したところ、電中研の協力会社（当時は株式会社環境リサーチ）でRITEの「CO₂海洋隔離プロジェクト」関係の人員を募集していますがどうですかとお声をかけていただきました。その後すったもんだもありましたが、99年に現在の職場にお世話になることになり、入社と同時にRITEへ出向しました。

そんな経緯があり、学生時代の恩師である平木敬三先生、近畿大学中口譲准教授、現在の職場へ誘ってくださった電中研の下島公紀上席研究員には現在も大変お世話になっています。

「学生時代の経験で役に立っていることは何でしょうか」

もっとも役立っていることは、整理整頓と清掃です（笑）。研究室では微量必須元素の分析を行っていたため、コンタミに対してとても気を配っていました。現在も実験室の整理整頓や清掃など実験環境には常に配慮しています。

また、いろいろな研究船に乗せていただいたことがあったため、採取した試料の貴重さに関する意識や、限られたスペースでの作業への慣れ、そして夜のディスカッション（宴会）を含めた、他の研究者とのコミュニケーションの経験など、船内生活は現在の仕事にも大変役立っています。

「今までのお仕事で印象に残るものがあればお話しください」

また船の話になってしまいますが、2000年から2001年にかけて、アメリカ、ロシア、イギリス船でそれぞれ太平洋、北極海、インド洋に行ったことです。仕事の内容もともかく、船内生活といえばやはり衣食住が気になる場所ですが、各国のお国柄があるなと思いました。アメリカ船はお菓子やアイスクリームなどが食べ放題でしたがドライシップでした。逆にイギリス船は船内にBARがありました。

でもやはり一番衝撃的だったのは、ロシア船でした。ロシアの食事といえば、ピロシキとボルシチぐらいしか知らず、少し不安でしたが、結構おいしかったと記憶しています。ただ、週一くらいで出てくる、レバーのステーキ定食（ご飯の代わりに蕎麦の実をゆでたものがついてた）みたいな食事は結構きつかったです。他にも洋式トイレなのに便座がなかったり、極めつけは入港直前にバウスラスターが火を噴いてあわてて消火したりもしていました。

最近、海外での仕事がなくなったため外国船に乗る機会がほとんどなくなってしまったのは少し残念ですが、やっぱり生活面は日本の船が一番です。

「地球化学の学会員であることのメリットは何でしょうか」

やはり人とのつながりが一番のメリットだと思います。最近社内業務が忙しく、長期の乗船に参加できなかつたり、年会への参加もままならない状況ですが、先の外国船への乗船などに関しても、地球化学会の知り合いの伝手で機会が回ってきたことは事実です。

また、水試料のような軟らかいものの分析だけでなく、仕事上で岩石や鉱物等の硬いものを分析する必要があった場合などでも、皆さんケミストですので、気軽に分析方法などのアドバイスをいただいたりしています。

「地球化学会の活動に期待することをお願いいたします」

地球化学会に限らないのですが、学生の就職先の情報などをもっと流していく必要があると思います。地球化学の分野は特に狭い範囲でクローズしており、アカデミックなポストは詰まっていることが多いです。

逆に一般企業などでは地球化学の分野を必要としていることも多くありますので、そのような情報を若い人に伝える橋渡し役となってほしいです。そんな意味で、この新連載は有効だと思います。

「最後になりましたが御社業務のセールスポイントをお願いします」

株式会社セレスは2003年7月に電中研の協力会社である株式会社シー・アール・エスと株式会社環境リサーチが合併してできた会社です。前身のシー・アール・エス時代から数えて、昨年30周年を迎えました。



写真2 新日本海事「新雄丸」による鹿児島湾航海 採水作業 (右が筆者)



写真3 我孫子市内の工場排水調査 採水作業 (右が筆者)

合併により、環境分野の調査、試験部門に加え、電力土木と原子力分野における調査、試験部門分野が業務の対象となり、電気事業の土木、原子力、環境分野に跨る総合的な技術コンサルタント会社となりました。

電中研の研究所がある地区にそれぞれ事業所が存在していますが、私の在籍する我孫子事業所がもっとも大所帯で中核的な事業所となっています。その他、狛江事業所には流速計試験所が併設されており、流速計の校正業務を実施しております。また、赤城事業所では12月よりバイオマス利用事業部を新設し、木質バイオマスを有効利用に向けた新規事業（当面は枯れ松材を利用した木質ペレット製造販売）を立ち上げる予定です。

我孫子事業所には、環境部の他、水理・構造部、地質・原燃サイクル部があり、各部で連携をとりながら、生物調査、陸域・海域の各種環境調査、環境アセスメント業務、水理模型実験、構造物の耐震・強度試験、地質・土質試験、放射性物質の輸送・貯蔵・処理

に関する調査・試験などの業務を行っています。

特に環境部では生物調査および化学分析・計測業務を柱として、環境計量証明事業、土壤汚染調査はもとより、地質調査や地下水の分析、セメントの分析などを行っています。

また、近年は電中研開発技術の実用化に向けて、水中無人探査システム（REMUS）の運用や、バイオセ

ンサー法による PCB 分析、微生物電気培養システム開発、ほう素センサーの開発（ほう素モニタリング装置）、現場型マルチセンサーの開発などに取り組んでいます。

その他、温泉でのガス爆発事故に対応した法改正に合せ、最近、可燃性天然ガス（メタンガス）の濃度測定事業にも着手いたしました。